

2019年3月期

(2018年4月～2019年3月)

決算説明資料



市川工場

 東洋合成工業株式会社

2019年5月17日 (金)

2019年3月期 決算概要

2019年3月期 業績ハイライト

- 売上高は過去最高の22,975百万円（前期比+2,438百万円、+12%）。
- 利益面は、感光材の生産能力増強に伴う先行費用増を消化し増益。
営業利益は1,559百万円（同+258百万円、+20%）、経常利益は1,567百万円（同+478百万円、+44%）、当期純利益は1,171百万円（同+307百万円、+36%）。
- 経常利益、当期純利益は過去最高益。

(百万円)	前期 実績値	修正 業績予想値	当期 実績値	前期比		業績予想比	
				増減額	増減率	増減額	増減率
売上高	20,536	22,500	22,975	+2,438	+12%	+475	+2%
営業利益	1,300	1,400	1,559	+258	+20%	+159	+11%
経常利益	1,089	1,350	1,567	+478	+44%	+217	+16%
当期純利益	863	830	1,171	+307	+36%	+341	+41%
1株当たり当期純利益	108.73	104.57	147.54				
1株当たり年間配当金	10.00	10.00	10.00				
為替レート (USD)	¥111/\$	¥110/\$	¥110/\$				

2019年3月期 決算のポイント

■売上高

- ✓ 22,975百万円（前期比+2,438百万円、+12%）
- ✓ 感光材（半導体向け・FPD向け（同+1,283百万円、+11.3%））、
化成品（電子材料向け（同+1,149百万円、+12.2%））で売上増。
また、化成品（香料材料・ロジスティック）についても好調が続いた。

■営業利益

- ✓ 1,559百万円（同+258百万円、+20%）
- ✓ 感光材の生産能力増強投資に伴う先行費用（労務費・減価償却費等+776百万円）が増加したものの、感光材・化成品の需要増に伴う増産効果で吸収し増益。

■経常利益

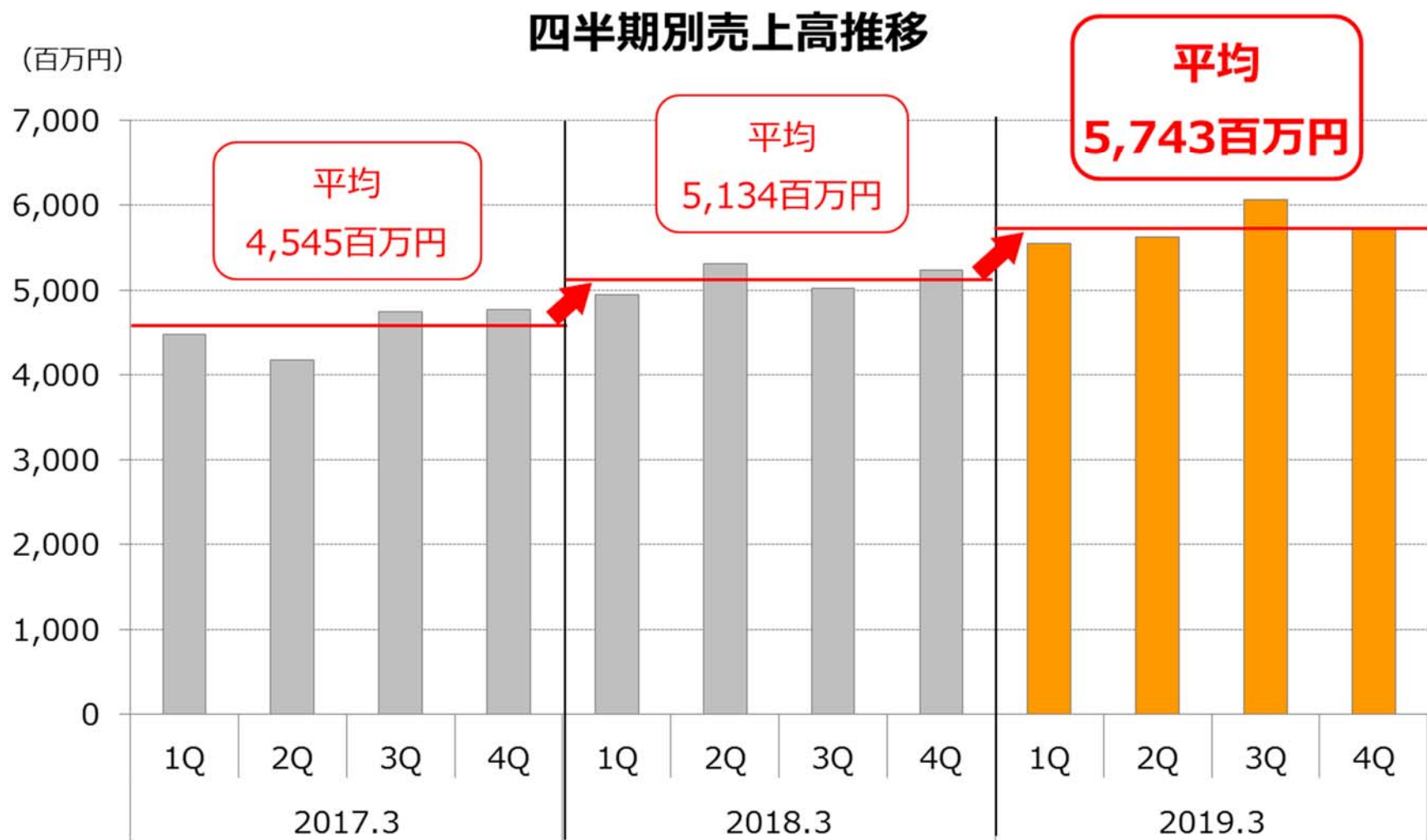
- ✓ 1,567百万円（同+478百万円、+44%）
- ✓ 営業外収益として、為替評価益33百万円を含む162百万円（同+97百万円）を計上。

■当期純利益

- ✓ 1,171百万円（同+307百万円、+36%）
- ✓ 経常利益、当期純利益は過去最高益。

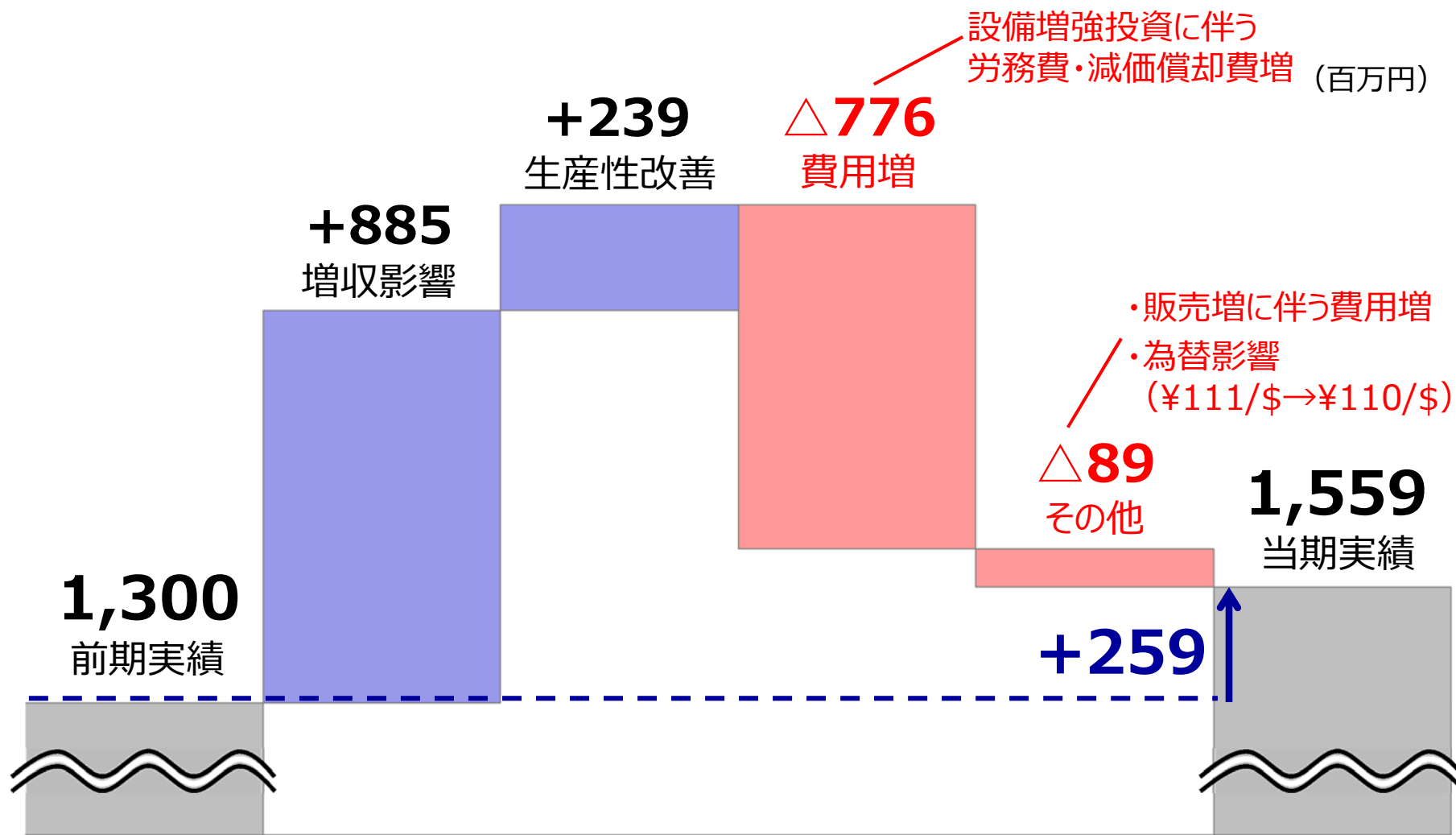
四半期別 全社売上高推移

- 四半期平均売上高は、着実に増加し、2019.3期は57億円台となった。



営業利益 増減要因

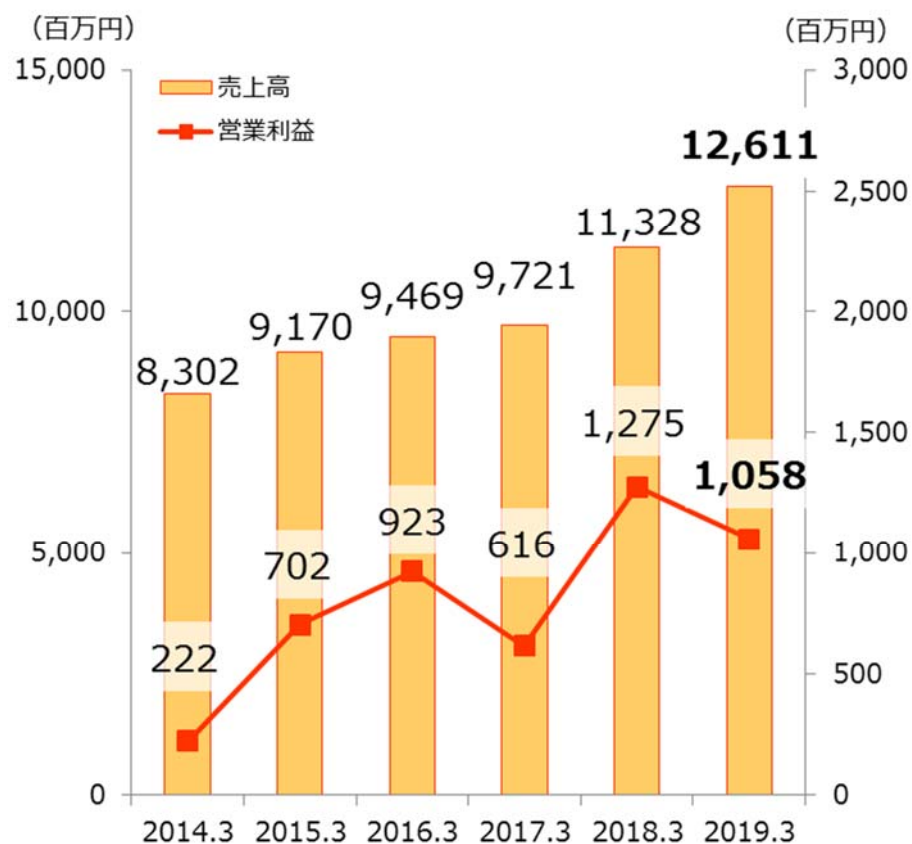
- 設備投資関連の先行費用増を、販売増で吸収し、増益。



感光性材料セグメント

- 半導体向け、FPD向け共に好調な販売が続いた。
- 生産能力増強に伴う費用が先行し、前期比減益。

売上高・営業利益



売上高：12,611百万円

(前期比+1,283百万円、+11.3%)

- 半導体向け感光材、FPD向け感光材ともに販売が好調に推移。
- EUV世代向け感光材の量産出荷開始。
- 有機EL向け感光材も堅調。

営業利益：1,058百万円

(前期比△216百万円、△9.1%)

- 生産能力増強に伴い、先行して労務費、減価償却費が776百万円増加したものの設備投資による増産を実現し、前期比216百万円の減少にとどめた。

化成品セグメント

- 電子材料向け高純度溶剤の販売増により、増収。
- 香料材料・ロジスティックも好調に推移し、セグメント利益は大幅増益。

売上高・営業利益



売上高：10,605百万円

(前期比+1,149百万円、+12.2%)

- 電子材料向け高純度溶剤の販売が増加。高付加価値製品へのシフト加速。
- 香料材料関連は好調に推移。
- ロジスティックは、高稼働が続き好調持続。

営業利益：500百万円

(前期比+475百万円、+20.1倍)

- 販売増により、増益。

損益計算書

- 売上高は22,975百万円、前期比+2,438百万円、+11.9%の増収。
- 売上総利益は、感光材事業の先行費用増を吸収し、前期比+435百万円、+10.6%。
- 経常利益は、為替差益の増加等により、前期比+478百万円、+43.9%。

(百万円)	2018.3期	2019.3期	増減額	増減率	
売上高	20,536	22,975	2,438	11.9%	[売上総利益 +435] 感光材事業の能力増強による 売上原価増を吸収し、増益
売上原価	16,435	18,438	2,002	12.2%	
売上総利益	4,100	4,536	435	10.6%	
販売管理費	2,800	2,976	176	6.3%	[営業外収益 +97、 営業外費用 △122] 為替差益+33、 受取保険金+47
営業利益	1,300	1,559	258	19.9%	
営業外収益	64	162	97	250%	
営業外費用	276	154	△122	△44.2%	
経常利益	1,089	1,567	478	43.9%	[特別損益 △171] 前期発生 of 固定資産売却益 の発生無し
特別損益	114	△56	△171	—	
税引前当期純利益	1,203	1,511	307	25.5%	
法人税等合計	340	340	△0	△0%	
当期純利益	863	1,171	307	35.7%	

貸借対照表

- 感光材の設備投資により有形固定資産+1,981百万円、現金預金+2,886百万円。
- 有利子負債は+3,524百万円、設備未払金計上等による負債その他+1,932百万円。
- 株主資本は、当期純利益の増加により、1,091百万円の増加。

(百万円)	2018.3末	2019.3末	増減額	
流動資産	12,617	17,228	4,611	
現金預金	2,525	5,412	2,886	[現金預金 + 2,886] 月末休日影響、設備投資 支払準備で一時的に増加
売上債権	3,695	4,314	619	[売上債権 + 619、 棚卸資産 + 713] 売上増に伴い運転資金増加
棚卸資産	6,108	6,822	713	
その他	287	679	391	
固定資産	17,511	19,637	2,125	
有形固定資産	16,585	18,566	1,981	[有形固定資産+1,981、 有利子負債 + 3,524、 負債その他 + 1,932] 感光材の設備能力増強投資 により増加
無形固定資産	331	417	86	
投資・その他	595	653	58	
資産合計	30,128	36,865	6,737	
負債	22,345	28,024	5,679	
仕入債務	2,872	3,094	222	
有利子負債	14,460	17,984	3,524	[自己資本比率] 24.0% (前期末比△1.8pt)
その他	5,012	6,945	1,932	
純資産	7,783	8,841	1,057	
株主資本	7,738	8,830	1,091	
評価・換算差額等	44	11	△33	
負債・純資産合計	30,128	36,865	6,737	

キャッシュフロー計算書

- 営業CF：2,097百万円 売上増により売上債権、棚卸資産が増加。
- 投資CF：△2,499百万円 感光材設備増強投資の実行により支出増加。
- 財務CF：3,268百万円 今後の支払いに向けた資金準備。

	2018.3期	2019.3期	増減額
営業活動によるCF	2,327	2,097	△229 ←
税金等調整前純利益	1,203	1,511	+307
減価償却費	1,687	1,944	+256
売掛債権の増減額（+は減少）	△512	△619	△107
棚卸資産の増減額（+は減少）	△219	△713	△494
仕入債務の増減額（+は増加）	687	222	△465
その他	△520	△247	+273
投資活動によるCF	△880	△2,499	△1,619 ←
フリー・キャッシュフロー	1,446	△401	△1,848
財務活動によるCF	△761	3,268	4,030 ←
現金及び現金同等物に係る 換算差額	△25	20	+46
現金及び現金同等物の増減	659	2,886	+2,227 ←
現金及び現金同等物の期末残高	2,113	5,000	+2,886

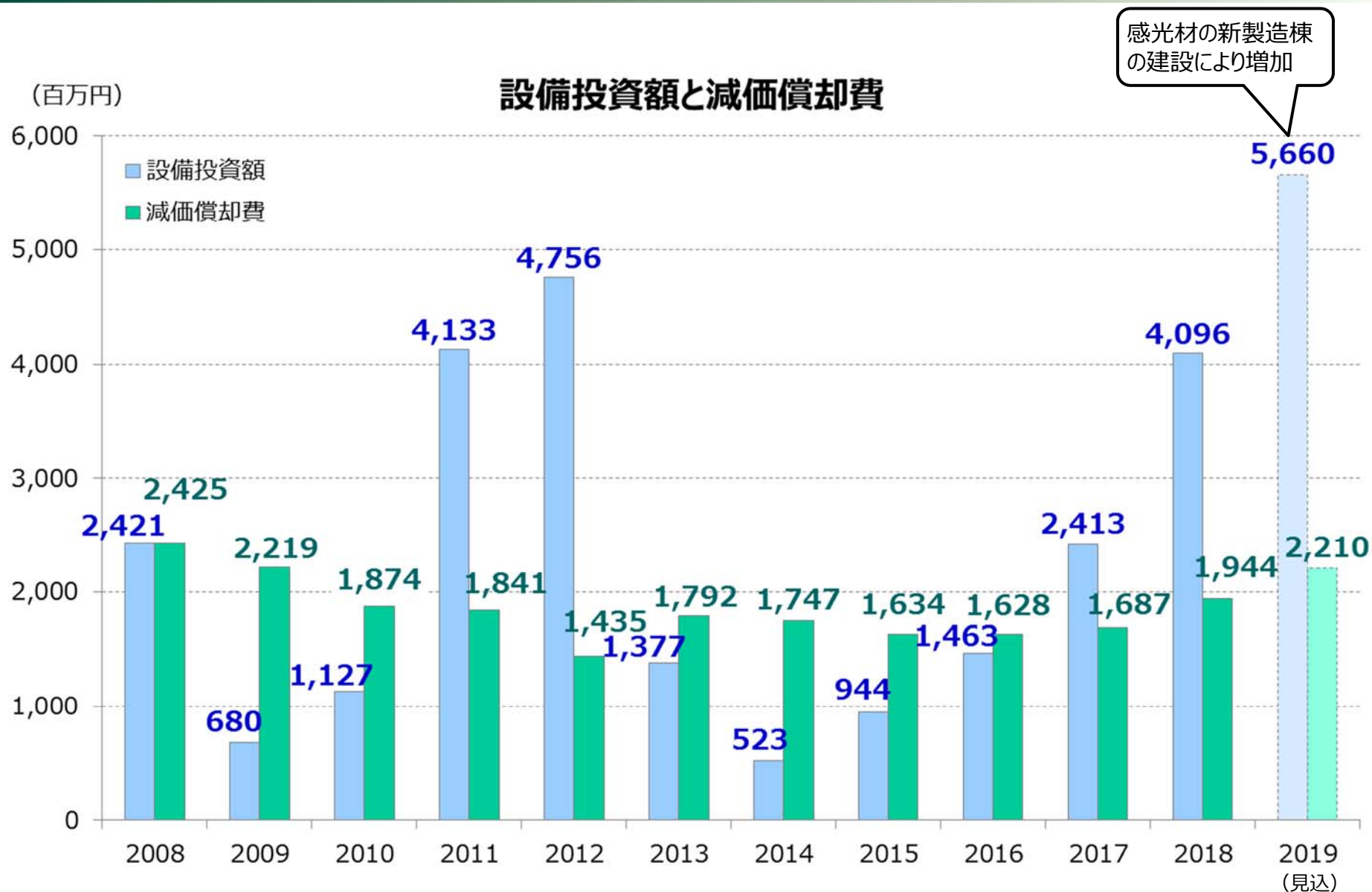
2020年3月期 業績見通し

2020.3期 業績予想

- 感光材の既存設備の能力増強工事が完了、生産・販売の増加による増収を見込む。
- 利益面においても、売上高の拡大に伴い増益予想。
- 想定為替レートは ¥107/\$。
- 1株当たり配当金額は、年間20円へ倍増。

	2019.3 実績	2020.3 業績予想	前期実績vs今回予想	
			増減額	増減率
(百万円)				
売上高	22,975	25,500	2,525	+11.0%
営業利益	1,559	1,800	241	+15.5%
経常利益	1,567	1,700	133	+8.9%
当期純利益	1,171	1,600	429	+36.6%
1株当たり当期純利益	147.54	201.58		
1株当たり年間配当金	10.00	20.00		
為替レート (USD)	¥110/\$	¥107/\$		

設備投資額と減価償却費の推移



今後の展望

市場ニーズ

- ✓日常生活の中で電子デバイスの使用の裾野が急拡大（5G、ビッグデータ、AI、IoT、EV、etc）
- ✓デバイスの微細化・高機能化の進展とともに、高純度・高機能の機能性材料が必要性拡大

お客様の要望

- ✓電子材料の高純度化要望が加速
- ✓少ロットかつ生産難易度が高いため、対応可能な企業が限定

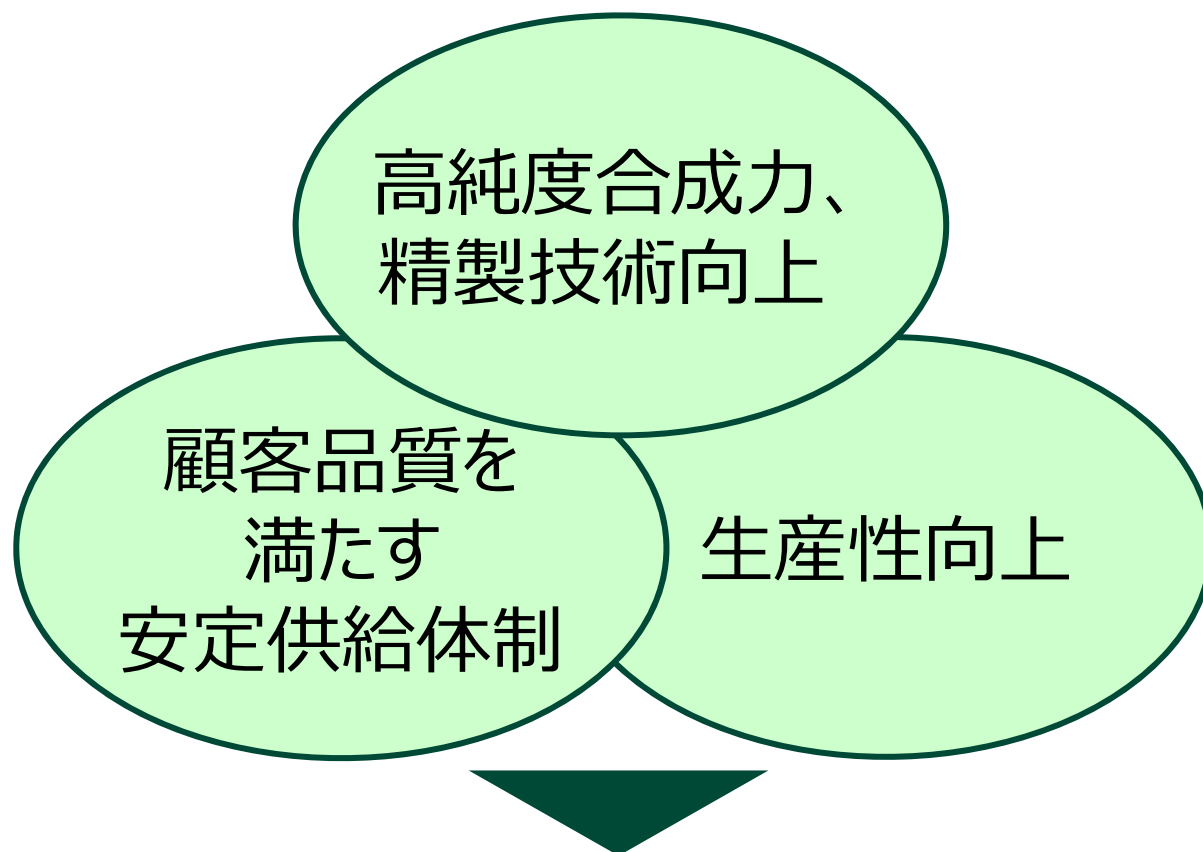
需要に対する課題

- ✓蒸留70年、感光材40年の経験を活かし、顧客品質を満たす供給の実現

施策

- 更なる高純度化技術の開発
- 生産能力の確保
- 生産性の向上

中期経営計画「TGC300」 コンセプト・ビジョン

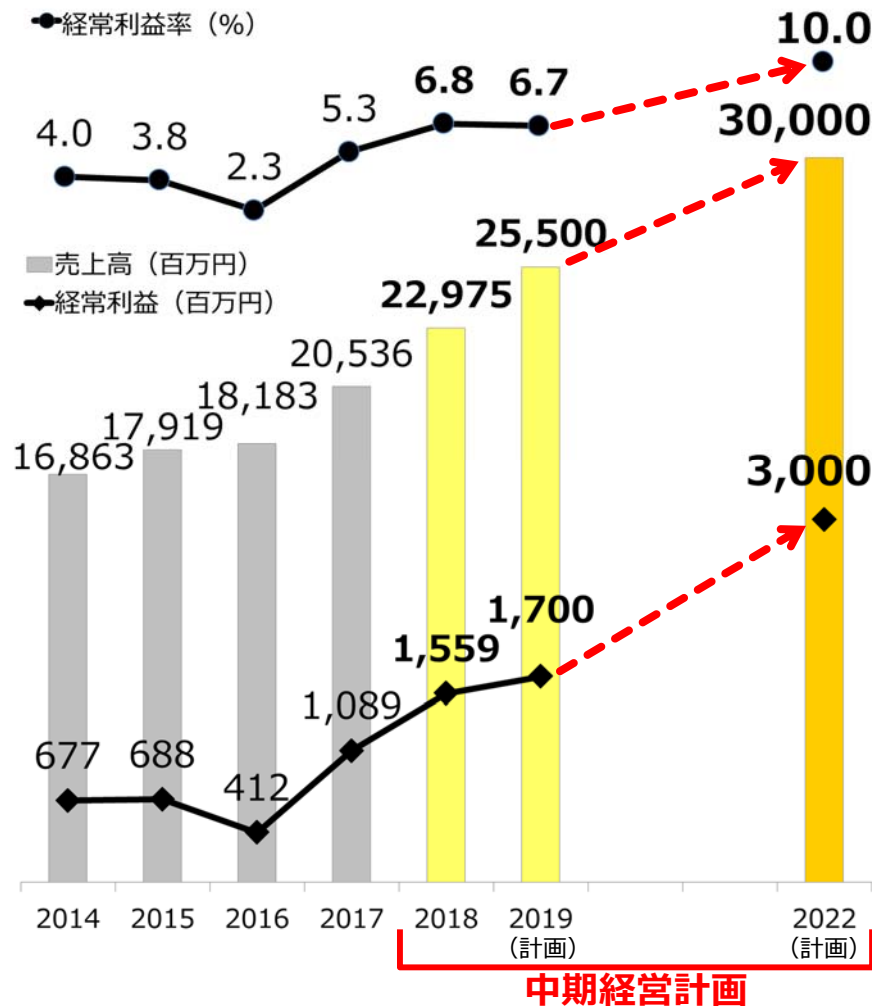


■ 「TGC300」のビジョン

顧客課題、技術課題一つ一つを真摯に独創的な視点で解決し、
超高品質・生産性で世界No.1ダントツ企業となる。

中期経営計画の進捗

- 中期経営計画「TGC300」の達成に向けて、計画通り順調に進捗。



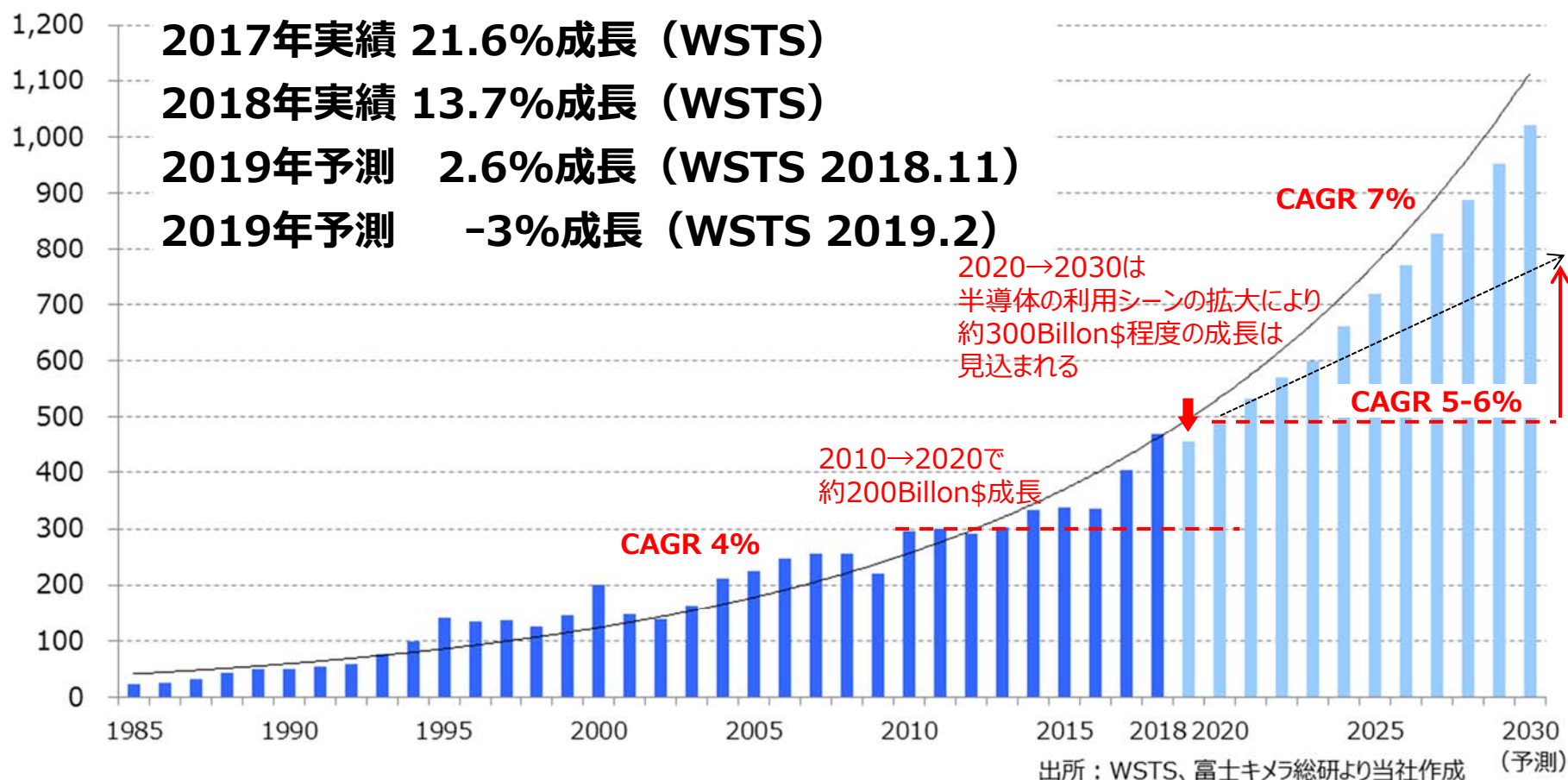
- 中期経営計画1年目は、計画を超過。
(売上高+2%、経常利益+16%)
- 感光材の供給増加に向けて、設備増強工事も計画通り進行中。
 - ✓ 既存設備の増強→完了
 - ✓ 新製造棟→2020年夏頃完成予定
- 中期経営計画の達成に向け順調に進捗

半導体市場の推移と予測

- 半導体市場は、足元は調整局面に入っているものの、底打ちが見え始めている。
- 半導体製造設備投資による生産能力拡大後に材料需要が拡大する傾向がある。
- 当社への需要は引き続き力強く、現段階で落ち込みは無い。

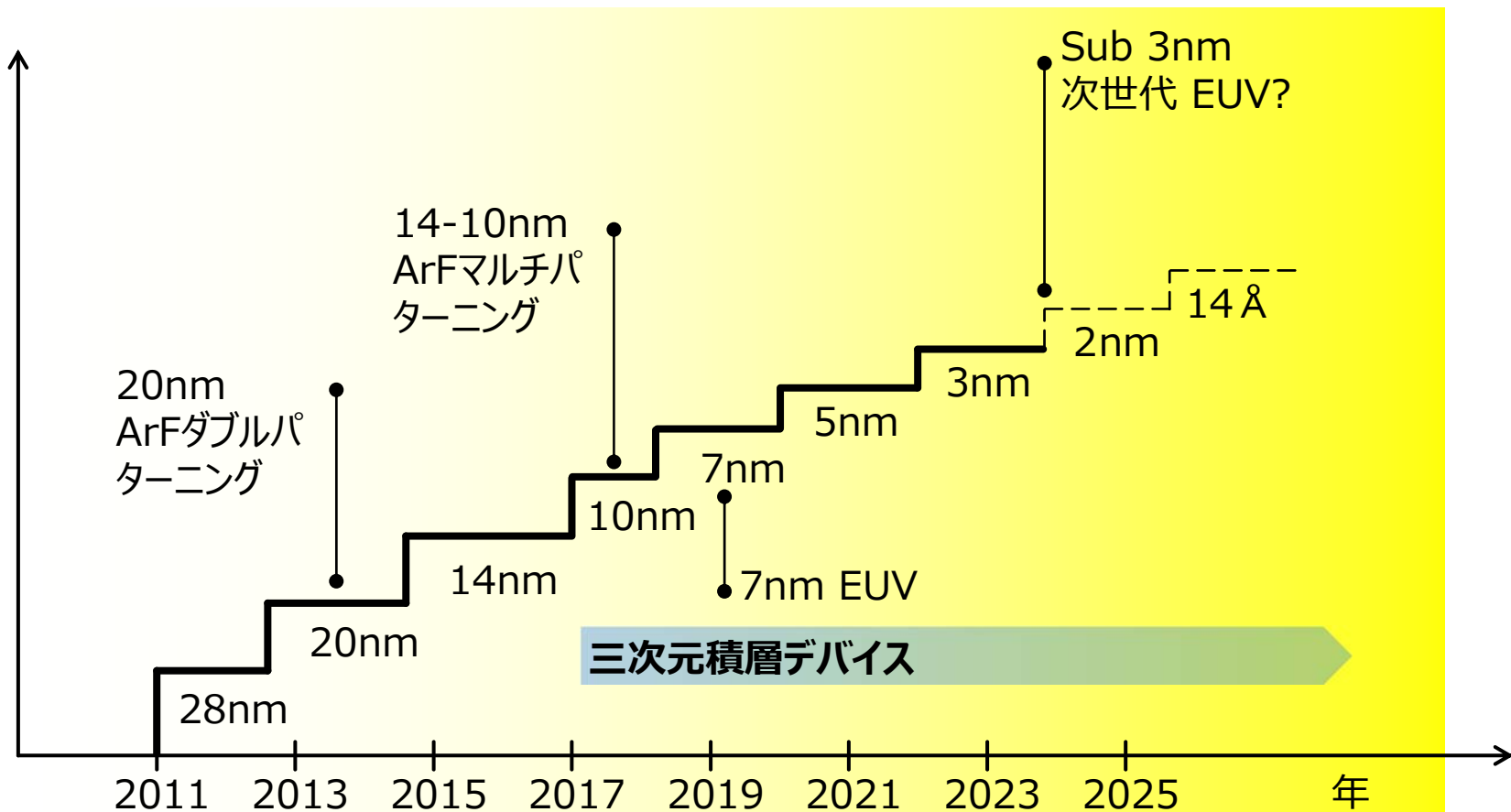
世界半導体売上高

(Billion USD)



リソグラフィ技術の微細化

- 半導体の線幅の微細化は継続、2019年時点では7nmまで量産化。
- 今後2025年に向けて、2nmレベルまで微細化が検討されている。
- 配線の微細化、三次元化、プロセス材管理の厳格化の進展に合わせ、超高純度溶剤、超高純度感光材のニーズは拡大傾向と認識。



光源別 線幅・用途一覧

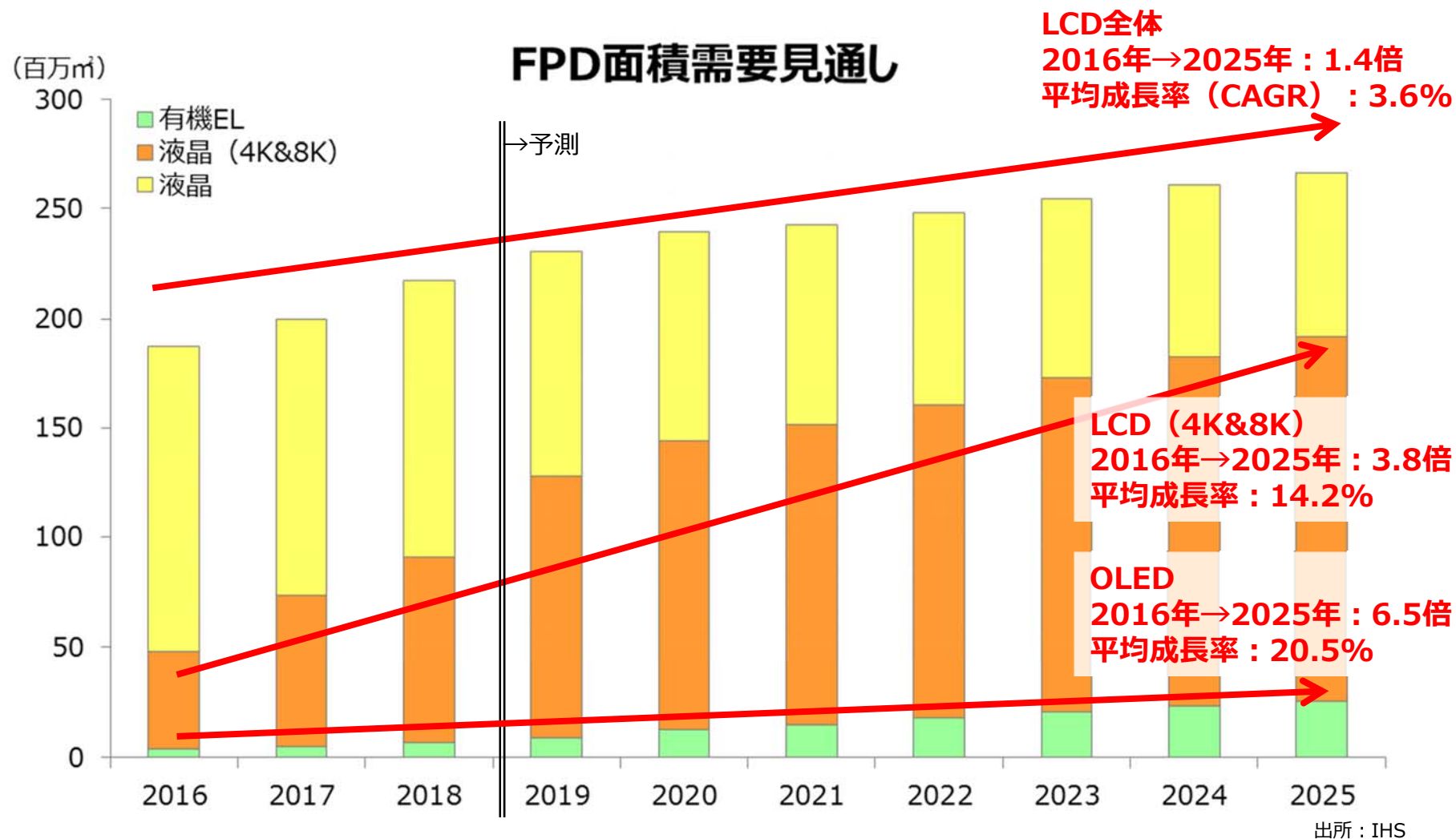
- 感光材は、旧世代（FPD中心）、先端世代（半導体）共に強い需要が持続。
- 2019.3期は、EUV向け感光材の本格生産も開始。
- 引き続き全世代の感光材の品質向上に対応し、製品ラインナップの更なる拡充を図る。

	FPDパネル用		半導体用								
	g + h + i 線	i 線	g 線	i 線	KrF	ArF	ArF 液浸	ArF DP	ArF MP		
									EUV		
線幅	~2,000nm	~1,000nm	~700nm	~200nm	~110nm	~65nm	~45nm	~22nm	~7nm	~2.1nm	~?
用途	テレビ用、一般用	先端中小型パネル	IGBT、LCDドライバ、LED								
			DRAM / NAND FLASH メモリ					次世代DRAM			
			先端ロジックLSI					次世代ロジックLSI			
市場	新興国の需要増	スマートフォン、タブレットによる拡大	緩やかに縮小	拡大	やや拡大	横ばい	量産拡大			開発中	2025年以降?

← 当社製品・研究開発のアプローチ範囲 →

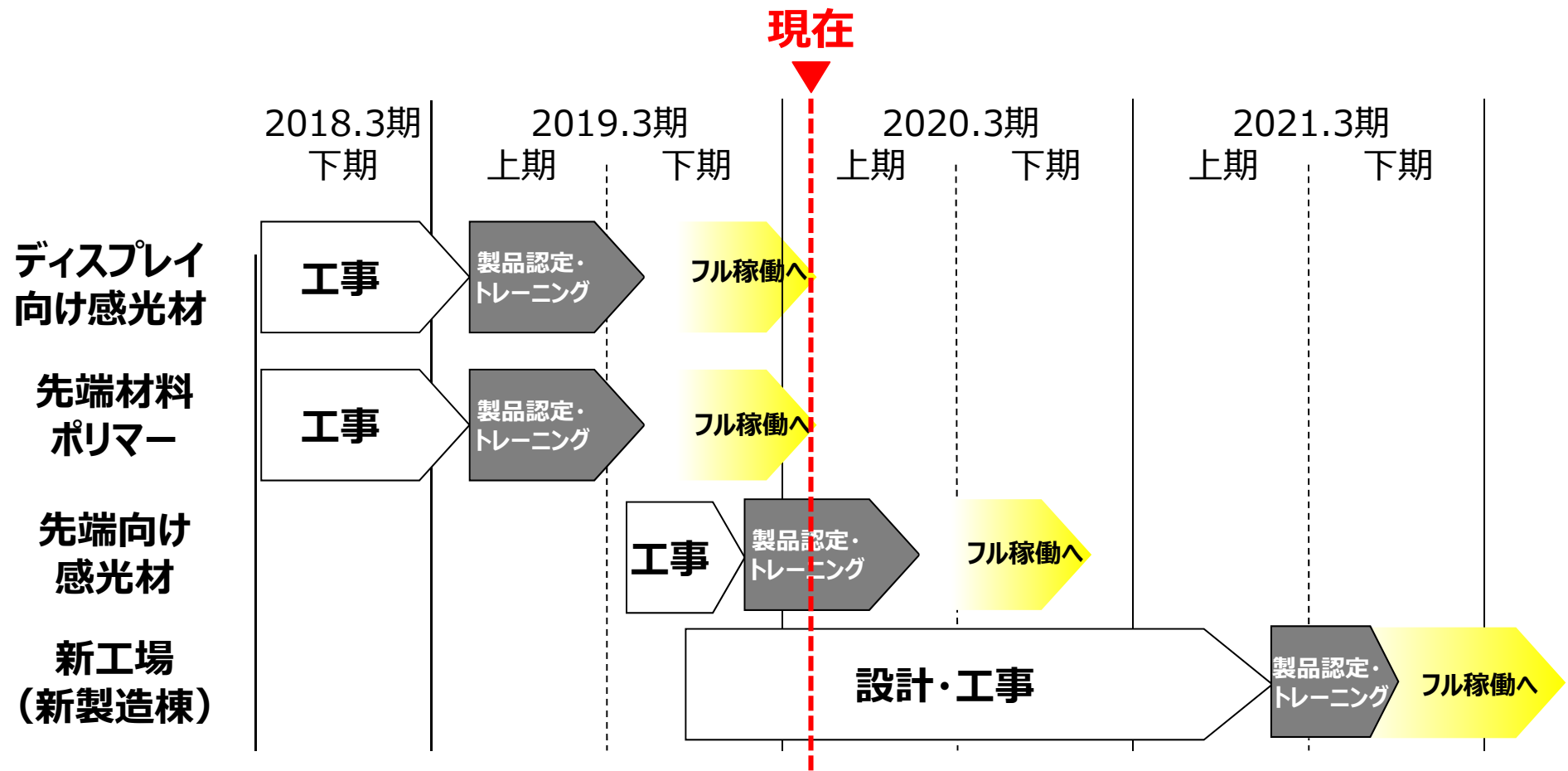
ディスプレイ市場 長期見通し

- FPD市場は、中国におけるFPD生産能力拡大、および大型ディスプレイの需要増などにより成長見込み。これに合わせてFPD向け感光材の需要も拡大が続く。



感光材の生産能力増強投資

- 継続的な需要増に対応するため、感光材の設備能力増強も計画通り進捗。
- 第1弾のFPD・ポリマー向け設備、第2弾の先端半導体向け設備の増強は完了。
- 第3弾となる新製造棟も2020年夏頃の完成に向け、計画通り進行中。



既存設備におけるFPD向け、先端半導体向けポリマー/感光材の能力増強工事が完了

- 先端世代半導体向け感光材（PAG）の設備増強工事は2019年2月に完了。
- 顧客認定を経て、2020年3月期下期から製品製造・出荷開始予定。

2019年5月8日付「化学工業日報」3面

東洋合成

感光材の供給体制強化

先端半導体向け増設完了

東洋合成工業は先端半導体向け感光性材料の供給体制を強化する。感光材主力生産拠点の千葉工場（千葉県東庄町）で進めてきた増強工事が完了。4月から稼働した。投資額は約14億円で、これにより感光材の生産能力は3割以上拡大する。同工場では2018年春にディスプレイ向け感光材を増強したほか、20年夏完成をめどに感光材新工場を建設する計画。一連の計画が完了すれば、17年時点に比べて旧世代、先端向けを含めた感光材の生産能力は約2倍に高まる見通しだ。

20年に新工場、能力2倍へ

感光性材料は半導体・ディスプレイの製造に用いられるフォトレジストの主原料で、東洋合成工業は感光材事業の主要製品として世界市場で高いシェアを有している。半導体分野では今後、IoT（モノのインターネット）

トの拡大や5G（次世代通信規格）の普及、AI（人工知能）・自動運転などの進化にともなう需要拡大が見込まれ、感光材の需要も高まる見通し。

同社は18年度からの5カ年中期経営計画で戦略



感光材第3工場の増強ラインは4月に稼働した（写真は反応設備）

投資枠120億円を設定し、電材関連を中心に積極投資する方針を掲げている。このなかで急増する需要に対応するため、3カ年計画で感光材事業に集中投資している。第1弾として千葉工場を昨年4月にディスプレイ向け感光材、先端半導体向け増強している。

先導半導体向けでは、千葉工場内に隣接している3つの感光材工場のうち一番規模が大きい感光材第3工場を16年秋にラインを増設しているが、

さらに第3弾として、

約70億円を投じて新工場「感光材第4工場」の建設を進めている。新工場は先端向け、旧世代向けに対応するマルチ設備とする計画で、20年夏の完成を目指す。18年から3度にわたる感光材の増強により、新工場稼働時点での感光材生産能力は17年比で約2倍となる見通し。

同社は感光材事業で、5線、1線プロセスなどの旧世代からARF（ラジカル）化アルゴン、EUVといった先端世代まで対応したレジストポリマーやナフトキノンのボジ型感光材、また化学増幅型レジストに用いられる光酸発生剤（PAG）と幅広く展開。化成事業ではフォトレジスト向け高純度溶剤を手にかけており、全売上高に占める電子材料関連の比率は約7割を占める。拡大する世界需要に対応し供給体制を整えるとともに、高品質・生産性の両立に重点を置いた取り組みを強めている。（児玉和弘）

化成品事業 電子材料向け溶剤・香料材料

- 電子材料向け溶剤もフォトレジスト用途、半導体製造用途、電子材料製造用途、それぞれで需要好調。化成品事業 各工場の稼働率も上昇。
- 今後一層の生産増に向けて、生産性向上により生産余力を確保。



香料工場

- 需要堅調な香料材料を中心に、大型ロット生産に対応



市川工場

- 化成品のマザー工場
- 電子材料向け溶剤を中心に一部香料材料も生産
- 少量多品種生産に対応

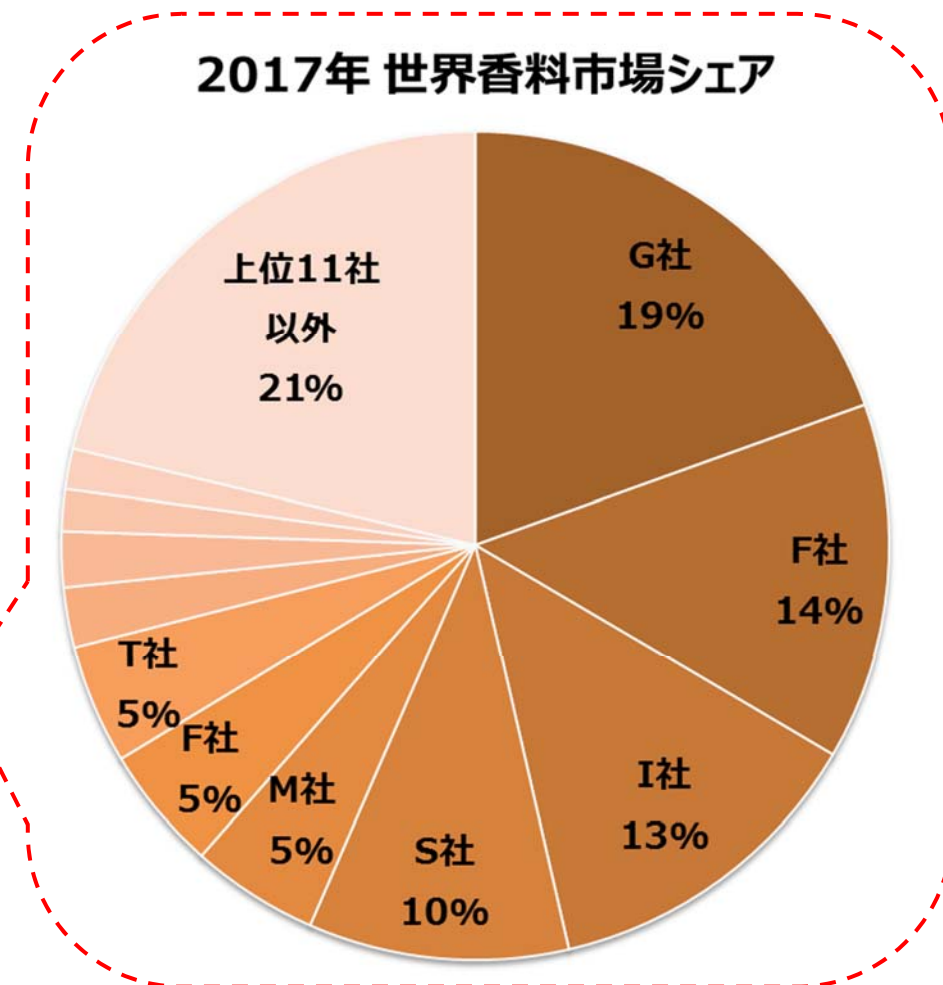
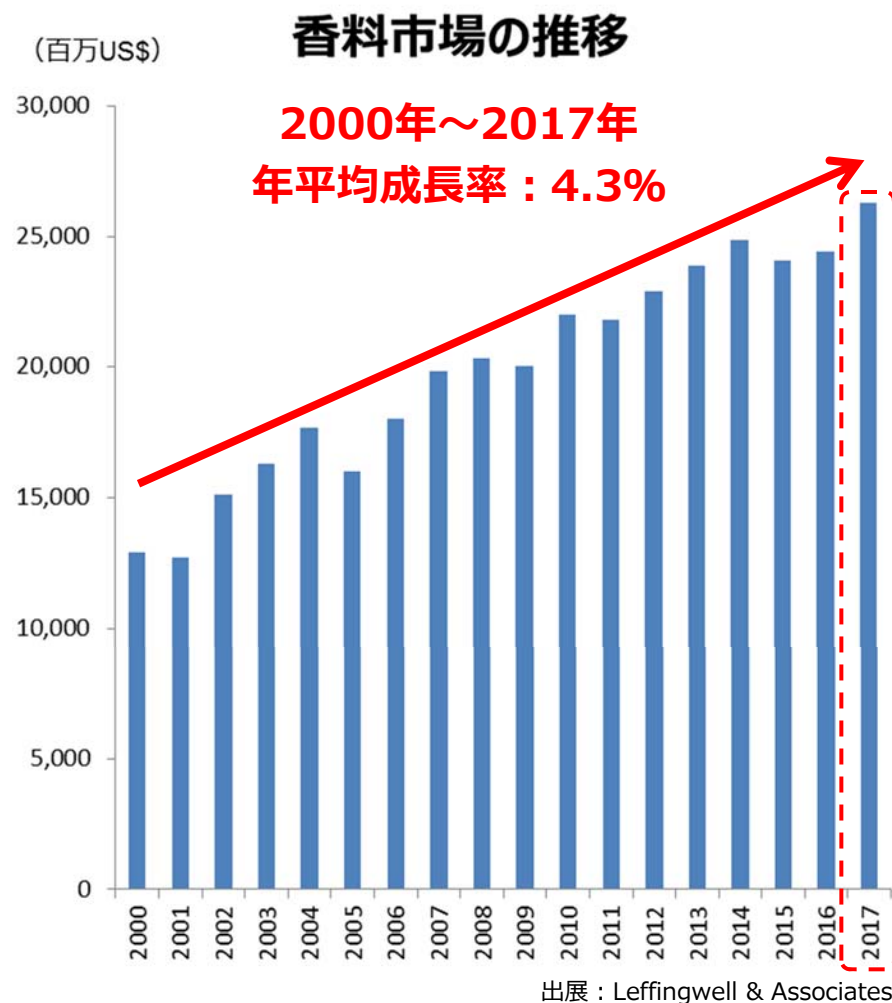


淡路工場

- 化成品の西日本主力工場
- 電子材料向け溶剤を中心に大型ロット生産に対応

化成品事業 香料材料

- 香料市場の年平均成長率は4.3%、今後も同水準の成長が続く見通し
- 世界香料市場は上位7社でシェア約70%



化成品事業 ロジスティック

- 化学業ならではの化学品管理・分析技術を活かし、顧客サービスを一層強化。
- 高浜油層所の荷動き量は好調、東京湾内最大のケミカルタンクターミナルのため高稼働が続く。



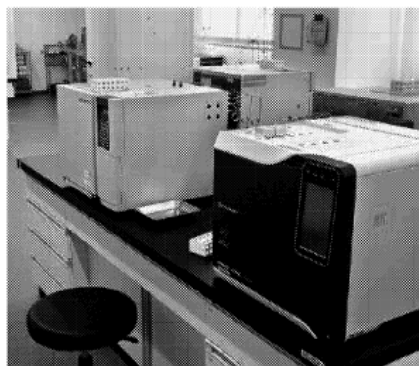
液化石油化学製品を求めてローリーが列をなす

素材現場力 東洋合成工業 高浜油槽所

中堅化学メーカー、東洋合成工業の高浜油槽所（千葉県市川市）は、樹脂原料や塗料用有機溶剤など液体石油化学製品の貯蔵・物流を担う。世界シェア首位クラスの素材も手掛けるメーカーとしての品質管理や汚染分析のノウハウを注入。東京湾に面し、高速道路にも近い地の利を生かし、関東一円の石化産業を支える。

午前6時。江戸川の河口に位置する高浜油槽所に、数十台のタンクローリーが並んだ。1時間後には次々に構内を後にする。運ぶのはインキ原料やトルエンなどの有機溶媒。国内外の石化メーカーが生産したものだ。合成は、合成繊維の精製や化成品を使った塗料原料が主力。半導体基板に回路を描くフォトリソ

原料物流 石化産業支える



分析室では運搬物の汚染の有無などをその場でチェックできる

品質管理にメーカー知見



高浜油槽所の全景
石油以外の化学品では、東京湾内最大のケミカルタンクターミナル



分析室が入る新管理棟（2018.5竣工）
分析設備を拡充し、品質管理が一層向上

ト（感光性樹脂）用感光材は世界首位クラスで、液晶や有機EL材料も手掛ける。高浜油槽所を拠点とする貯蔵・物流事業も、収益源の多様化をにらみ1971年にタンク11基でスタートした半世紀近い歴史を持つ。

この分野でまず重要なのが、規模と立地だ。油槽所は東京ドームよりも少し狭いほどの敷地に65基のタンクが並ぶ。合計5億5400万リットルを貯蔵可能。タンクローリーに石化製品を供給するプロセスを25レイン持ち、毎時最大90台に供給できるのは致命的だ。コンテナ船は日本で「最大級」（ロジスティック事業部の渡辺宏一事業部長）だ。油槽所から車で2分ほど移動すると、東京外環自動車道（外環道）や東関東自動車道につながる

分析室では運搬物の汚染の有無などをその場でチェックできる

一方、今後の課題は地震対策だ。東京湾岸で懸念されるのが、大地震による液状化現象。11年3月の東日本大震災では、護岸周辺が隆起するなどの被害があった。

東洋合成は地盤改善のため、国土交通省所管の港湾空港技術研究所と共同研究に着手。地震対策の新しい工法を開発し、埋め立て地域のプラントへの適用や技術供与を検討している。

製品の生産動向に注目が集まりがちな素材産業だが、輸入原料の受け入れやプラントへの輸送こそ事業の生命線。東洋合成は緑の下の力持ちとして、油槽所の品質管理術を磨き続ける構えだ。

（天野慎士）

独創的な視点で世界へ

Individual Development, to the global Chemical

東洋合成工業株式会社

(見通しに関する注意事項)

本資料の業績予想は、現時点において見積もられた見通しであり、これまでに入手可能な情報から得られた判断に基づいております。

従いまして、実際の業績は、様々な要因やリスクにより、この業績予想とは大きく異なる結果となる可能性があり、いかなる確約や保証を行うものではありません。